

学校行事

鑑賞と対話を通して、他者と自己を深く理解し、 社会で求められる普遍的な力を身につける

熊本県立第二高校

「全校若しくは学年又はそれらに準ずる集団で協力し、よりよい学校生活を築くための体験的な活動を通して、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養いながら」特別活動が目標に掲げる資質・能力を育成する教育活動である学校行事。熊本県立第二高校では、コロナ禍においても生徒に良質で体験的な活動を提供するため、「ベネッセアートサイト直島」の教育プログラムを実施。平素と異なる環境での生徒の学びと成長を紹介する。

ピンチをチャンスに！ 体験的な教育活動に挑戦

熊本県立第二高校美術科は、1年次に海外研修旅行を予定していたが、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、「ベネッセアートサイト直島」(以下、「BASN」)での教育プログラムの実施に変更した。「BASN」は、瀬戸内海の直島、豊島、犬島を舞台に株式会社ベネッセホールディングスと公益財団法人福武財団が展開するアート活動の総称で、世界的な建築家である安藤忠雄氏の設計による、ホテルと美術館が一体となったベネッセハウスや、地域固有の自然や文化の中に配置された現

代アートは、他に類を見ない作品として高く評価され、国内外から多くの訪問客を集めている。山本朝昭校長は、「困難な状況下で、チャンスを創り出す経験をしてもらいたかった」と、「BASN」の教育プログラムの企画に至った思いを語る。

「コロナ禍によって、学校行事を始めとする、これまであたり前だった教育活動ができなくなりました。しかし、様々な制限の中でも、発想と工夫次第で、今まで以上に質の高い活動ができることを生徒に実感してもらいたいと考えました。海外でなくても、美術科の1年生に必要な経験ができる場所、さらに、その経験を普通科や理数科にも還元できる

図1 研修旅行日程

- 1日目 (直島)**
 - ・安藤忠雄氏講演
 - ・ベネッセハウス ミュージアム鑑賞
 - ・グループで1日の気づきを共有
- 2日目 (直島)**
 - ・「家プロジェクト」フィールドワーク
 - ・グループワーク「新しい作品、若しくは社会システムの提案」
 - ・地中美術館鑑賞
 - ・グループワーク・発表
- 3日目 (犬島)**
 - ・犬島のアートプロジェクト鑑賞

*学校資料を基に編集部で作成。

熊本県立第二高校

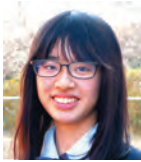
- ◎創立の精神は「自主積極・謙恥自尊・礼節協調」。県下唯一の美術科を有する。熊本地震の被災後は、全学科で「くまもと地域復興論」を設置するなど、「創造的復興」に向けた教育にも力を注ぐ。
- ◎設立 1962 (昭和37)年
- ◎形態 全日制/普通科・理数科・美術科/共学
- ◎生徒数 1学年約400人
- ◎2020年度入試合格実績(現浪計)
国公立大は、筑波大、東京藝術大、東京大、広島大、九州大、熊本大などに236人が合格。私立大は、多摩美術大、中央大、武蔵野美術大、早稲田大、立命館大、関西学院大などに延べ441人が合格。
- ◎URL <http://kumamoto-2hs.ed.jp/>

プログラムを考えた時に、「BASN」という選択肢が浮かんだのです」同校の教師は、「BASN」のエデュケーション担当とオンライン

ミーティングを重ね、地域とかわり合うアートを体験しながら、「自分たちが学ぶ美術を通じて、どのような社会貢献ができるのか」を考え



美術科・1年生
張佳明
 ちよう・よしあき



美術科・1年生
大城ひかる
 おおしろ・ひかる

生徒



美術教諭
牛島佳子
 うしじま・よしこ
 教職歴14年。同校に赴任して11年目。



美術科主任
弘孝昌
 ひろ・たかまさ
 教職歴29年。同校に赴任して1年目。



校長
山本朝昭
 やまもと・のりあき
 教職歴38年。同校に赴任して3年目。

教師

るプログラムを立案。「本物のアートに触れる中で好奇心を喚起する」「入力と出力をループさせる」「互いの気づきを交換する」を柱に、活動内容を決めた。そして、事前学習を経て、12月、美術科全41人の生徒が直島を訪問した。



写真1 直島の歴史、そして現代アートの価値を語る安藤忠雄氏の言葉は、これから始まる研修旅行に対する生徒の期待をさらに高めた。

岡山県の宇野港から直島までは船で20分。生徒たちが臨んだ研修旅行の最初のプログラムが、ベネッセハウスの地中美術館など、「BASIN」の代表的な美術施設の設計を多く手がけた建築家の安藤忠雄氏の講演だ(写真1)。安藤氏は、「BASIN」の活動の始まりや、アートと建築が

普遍的な学びを
 生徒に与えた安藤氏講演

1日目
 ● 安藤忠雄氏講演
 ● ミュージアム鑑賞

安藤忠雄氏講演(要旨)

兵庫県立美術館には、サミュエル・ウルマンの詩「青春」をモチーフに私がデザインしたオブジェ「青いりんご」があります。日頃から、甘く実った赤りんごではなく、未熟で酸っぱくとも、明日への希望に満ちあふれた青りんごの精神を持ち続けたいと思っています。皆さんにも青い気持ちを大切にしたいと思っています。今は100歳まで生きる時代です。長生きをするのだから、好奇心を持って、楽しいものをゲットしないともつたない。せっかく直島に来たのだから、皆さん、ここでも何かを吸収してほしい。そして、直島の海でも、アートでも、自分の顔でも、何でも構わないから、今日一枚、絵を描いてみてください。直島に来た思い出が心に深く残ります。

ベネッセアートサイト直島は、ベネッセの社長だった福武總一郎さんが、「直島を世界一の現代美術の島にしたい」と、1987年に私に相談に来たのが始まりです。ただ、福武さんに連れられて直島を訪れた私は、「ここはアカン」と反対しました。土砂や石材の採掘、工場の煙害などで、緑が失われた島に人が来るわけがありません。しかし福武さんは、「よいものがあれば必ず人は来ます」と譲りませんでした。そして今、美術を愛する人たちが世界中からこの島を訪れています。福武さんの言った通りになりました。彼は自分の信じる道を自由に生きようという気持ちと、それを貫く勇氣を持ってきているのだと思います。

えない向こうに何かがあるかもと好奇心を持った人にだけ見ることができのです。それは皆さんの人生と同じです。壁にぶつかっても、向こうに何かあると思える人自分が信じる道を生きようと思いを貫ける人になってください。コロナ禍は確かに私たちに与えて難しい問題だけれども、この困難の向こうに何かあるのかを考えることが大切です。直島のアートに対しても、「分からない」と諦めず、何が面白いのかを考えてみてください。

これからの時代は、芸術、科学、技術の力を磨くことで、世界の人々から信用を得られます。皆さんは、同じ地球の上で世界の人たちと生きるのですから、自分の身の回りを、そして日本を、世界をよりよくしていかなければなりません。小さなことでも、世界のためにできることはたくさんあります。この直島も、こんなに緑豊かな島ではありませんでした。しかし、ここまで魅力的な島に変わったのです。

人と人のつながりを大切に、世界を変えていくのは、皆さん一人ひとりの心です。AIではありません。直島のアートに触れて心を豊かにしてください。海を眺める時も、「この海は俺の海だ」と思って眺めてみてください。見えなかつたものが見えてくるはずですよ。





写真2 アーティストが直島を訪れ、この場所のために制作した作品を鑑賞する。場や空間と一体となった、ここにしかない本物に出合えるのが研修旅行の醍醐味だ。



写真3・4 スタッフの問いかけをきっかけに、自分の考えを交換する生徒の姿は、「主体的・対話的で深い学び」を体現したものだ。



写真5 町を散策するようにアートを鑑賞する生徒たち。アートが人にもたらす影響、社会におけるアートの可能性を、生徒たちはその場に身を置いて考えた。

融合する魅力などを、芸術家や文芸家との交流のエピソードを交えて語りながら、世界の人々とつながるために豊かな心で深く学ぶこと、よく学び、よく遊ぶことが大切だと訴えた（P.17要旨）。

安藤氏の講演を聞いた大城ひかるさんは、「建築の領域にとどまらず、人生そのものに通じる学びをいただいた」と感想を語る。

「『暗闇の向こうに何かがあると信じなさい』という安藤先生の言葉が心に残りました。私も今後の人生で、壁にぶつかっても諦めず、壁の向こう側に希望を見いだすようにしようと思いました。また、原点から考えることの大切さについてのお話も印

象的でした。明日、私たちが訪問する、安藤先生が設計された地中美術館には、クロード・モネの『睡蓮』が、自然光だけで鑑賞できるように展示されていますが、モネが見ていた睡蓮がどんなものだったのかを想像し、原点に立ち返ってみることは、作品を鑑賞する上でも、また、自分が今後作品を作っていく上でも大切なことだと思いました」

主体的に学び合う力を 発揮し始めた生徒たち

ベネッセハウスミュージアムでは、スタッフと一緒に、作品を鑑賞した（写真2）。現代アートは観る

人によって様々な解釈ができる。美術教諭の牛島佳子先生は、生徒たちが好奇心を持って作品に向き合い、それぞれの気づきを交換することを期待していたが、生徒たちが自ら対話を始め、思考を深めていたことに感動したという（写真3・4）。

「生徒たちがある作品の前で、その作品から想像したことを活発に話し合う様子を目にしました。生徒から言葉を引き出したのは、アートが持っている力だと思えます。生徒が仲間の力を借りながら主体的な学びができるようになった時、教師の役割はこれまでもとは違ったものになるのだろうと、対話を通して学び合う生徒の様子を見て思いました」

意見を伝える勇気の必要性に 他者との対話を通じて気づく

島内に点在する空き家などを改修し、人が住んでいた頃の時間と記憶を織り込みながら、暮らしの空間を作品化する「家プロジェクト」。生徒たちは地図を手に町を歩き、7軒の作品を見て回ったが（写真5）、鑑賞中も生徒たちは、「アートが担う役割」などについて語り合っていた。

張佳明さんは、「友人と感じたことを語り合う中で、他者の視点を取り入れながら自分の考えが深まっていった」と振り返る。

「お互いの考えが深まるような対話をするためには、自分の意見をきちんと相手に伝える勇気が必要だと気がつきました。僕は周りの空気に流されがちなので、すぐには変わらないかもしれないけれど、安藤先

2・3 目

- フィールドワーク
- グループワーク



写真6 理想の社会を実現するために、アートで何ができるのかを考える。環境問題や防災など、直島の自然や作品鑑賞を通して考えたことを基にした提案が行われた。



写真7 生徒たちは、その場、その時の気づきを言葉にして、Classiに蓄積していった。



写真8 研修旅行中の学びや気づきが並ぶClassiの画面。生徒の書き込みに「まとまらない」という課題があるように、生徒のつばやきをすくい上げる場としても機能した。



写真9 研修旅行の思い出を、生徒はそれぞれの形式でポートフォリオにまとめた。同じ場・時間で異なる学びを得たことを確認し、それぞれの学びをさらに深めた。

ICTを活用して 学びを即座に共有する

生徒たちは、取り組むべき社会課題を設定し、実現したい未来の社会を描いた上で、それを表現した作品や実現に必要な社会システムを考えるグループワークにも取り組んだ(写真6)。安藤氏の講演、ベネッセハウスミュージアムや地中美術館「家プロジェクト」での現代アート鑑賞と仲間との対話、そして瀬戸内

海の直島の自然などから、イメージやヒントを得ながら、グループでアイデアを膨らませていった。アート鑑賞を通じたインプットを良質なアウトプットにつなげていく際に役立ったのがICTだ。Classi(注*)を導入している同校は、生徒が研修旅行中の学びや気づきを即座に言語化できるように、Classi上で教師から問いを投げかけたり、感想を自由に書き込ませたりした(写真7・8)。生徒は、互いの書き込みに対して感想などを書き込み合うなど、オンライン上でも活発に意見交換する様子が見られた。美術科主任の弘孝昌先生は、「ちよつとした感想や疑問を大切にすることで学びが

広がる可能性があることを、事前学習で繰り返し伝えていた」と語る。「事前学習でも、現代アートや直島に対していろいろな疑問が生徒の中に生まれていたもので、私たちは生徒に、それらを書き留めたり、言葉にしたりすることを促しました。そうすると生徒たちは、『こんなささいな疑問でも口にいいたいんだ』『自分の何気ない言葉が、ほかの人の学びにつながるんだ』と分かり、質問をどんどんするようになりました。そのため、生徒たちは、直島でも積極的に話し合い、考えを深められたのだと思います」

他者を通じた学びの 価値を身をもって知る

学校に戻った生徒は、研修旅行のまとめとして、旅行中の写真、風景などを盛り込んだポートフォリオを作成(写真9・P.20写真10)。さらに、直島で見た作品の感想やアートと地域の関係についての考察、あるいは研修旅行がその後の自分に与えた影

1か月後

● アルバム、
 アートエッセー
 作成

* 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

響など、各自が自由にテーマを設定して2000字以内のエッセーを書いた。それらは、今後の高校生活で取り組む探究活動や、大学入試での志望理由書などにもつながっていくことを期待したものだ。

「何人かの生徒が、『ほかの人が物事を見て何を考えているのか、なぜ、そう考えているのかを知りたい気持ちが強くなった』と私に話してくれました。多くの視点を通して本質に迫ろうとする感性が確実に磨かれていると感じました」(牛島先生)

「同じ経験をして、人によって気づきや学びが異なることで、お互



写真10 大城さんのポートフォリオの一部。安藤氏の講演から得た気づき、憧れのアーティストの作品に接した感動がつけられている。

いの理解が深まることに、多くの生徒が気づいたと思います」(弘先生)

弘先生、牛島先生が実感した成果が確かなものであることは、生徒の次の言葉からも分かる。

「社会の出来事に対してほかの人がどんな意見を持っているのか、もっと知りたいと思うようになりました」(張さん)

「地域の中のアートの役割を考えたことがきっかけになって、目に見えるものだけでなく、今は見えていない物事の本質を追究しようとする力が身についてきたように思います」(大城さん)

研修旅行をサポートした担当者

アートを通じて思考力や社会を見る目を養うBASNの教育プログラム

公益財団法人 福武財団 藤原綾乃さん

BASNでは学年や行程に合わせた教育プログラムを実施しています。今回は美術科の生徒向けに、BASNの作品鑑賞を通じてアートの役割とは何かを考え、その視点を生かして社会の課題を解決するグループワークを提案しました。安藤氏の講演、対話を用いた主体的な作品鑑賞、作品を通じて瀬戸内の自然や集落の魅力に気づく体験から、生徒たちのプレゼンテーションでは、思考を引き出す装置としてアートを取り入れたものが多く、アイデアも多岐にわたりました。どのグループも、体験から得たことを自分たちなりに解釈してアウトプットにつなげることができており、答えが1つではない課題に取り組んだ経験値や達成感、将来自分で自分の道を切り開いていく自信につながると考えます。また、作家の制作プロセスを追体験するワークショップにより、個性豊かな創造力も発揮されました。BASNの作品は、作家の様々な表現方法によって場の固有性を引き出し、鑑賞者に新しい視点を提示しています。自然、建築、地域、人、アートが融合する場で、より多くの関係性に気づき、総合力を養う学びを支援したいと考えています。

BASN教育プログラムお問い合わせ
<https://benesse-artsite.jp/education-program.html>

感染対策と教育効果を保護者に丁寧に伝える

コロナ禍でも生徒によりよい学びの機会を提供しようと、同校が初めて実施した「BASN」の教育プログラム。事後アンケートで集計した生徒の満足度は、例年と比べても高かったと言う。山本校長が期待した通り、生徒にとっては「困難な状況下で、チャンスを作り出す経験」になったと言えるだろう。

「保護者に安心して子どもを送り出してもらうために、学校としても感染対策において様々な配慮や工夫

をしました。人が密になることがないように、フェリーをチャーターしたり、バスを2台手配して1人2座席割りあてたりしました。また、旅行中に生徒が発熱した場合の対応を具体的に保護者に説明するなどしたことで、保護者の不安は随分払拭されたと思います。しかし、すべての生徒が参加できたのは、保護者の不安をしっかり受け止めて、安心・安全のための対策を説明した上で、保護者の不安を打ち消すほどの大きな教育効果がある研修旅行であることを、本校の教師が保護者説明会などの場で直接訴え、私たちの考えを理解してもらえたからだと思えます」(山本校長)

「BASN」での生徒と教師の学びや気づきを、様々な教育活動につなげていきたいと、山本校長は語る。

「『BASN』で目にした現代アート、そして直島そのものの歩みは、普通科や理数科の生徒にも大きな刺激をもたらすでしょう。STEAM教育の必要性が叫ばれる中、今回の研修旅行を、生徒と教師が本校における教育の本質を改めて追究していくきっかけにしたいと考えています」(山本校長)